

〈朝戸出〉の君

——大伴坂上郎女歌五八五について——

東 茂 美

一 はじめに

『万葉集』中、長歌六首、短歌七十七首、旋頭歌一首の計八十四首にも及ぶ作品が収載される大伴坂上郎女のうたにあつては、その成立背景をやや饒舌とも思われるほどに、注記として添えた作品を見ることが出来る。たとえは

右、大伴坂上郎女の母石川内命婦と安倍朝臣虫麻呂の母安曇外命婦とは、同居の姉妹、同氣の親なり。これによりて郎女と虫麻呂とは、相見ること疎からず、相語らふことすでに密かなり。聊かに戯歌を作りて問答をなせり。

といった具合である。そして、この左注を伴うのは

安倍朝臣虫麻呂の歌一首

向かひ居て見れども飽かぬ我妹子に立ち離れ行かむたづき知らずも

大伴坂上郎女の歌二首

(巻四、六六五)

相見ぬは幾久さにもあらなくにここたく我は恋ひつつもあるか

(同、六六六)
恋ひ恋ひて逢ひたるものを月しあれば夜は隠るらむしましはあり待て
(同、六六七)

のうたうたである。併しながら、今日見られる題詞と左注によつて保証される部分を棄て、うたの表現にのみしたがつて読めば、おそらくうたは、次のように読めるはずである。男は、見飽きない女の姿容に床を立ち離れるきつかけがないとうたう。女は、しばしば逢うことのできる幸いを欣然として認めつつも、その一方で逢えぬ時にはどれほど恋ひ慕つているかを嘆き、そして合歡の夜こそ「恋ひ恋ひて逢ひたるものを」と、空の月を見遣つては時をはかり、男をしとねにとどまらせようとする。男の情愛に凭れかかるような甘美なうたをうたうのである。うた表現からは、こう読む以外にはないであろう。したが、服部喜美子氏は、「いわゆる現実の恋愛を交した関係ではなかつたから、相愛の男女の贈答としか受けとめられないような表現の相聞歌に、わざわざ身近な家持が『戯の歌』と注記せざるを得なかつた」と論じられている。確かにそうであろう。う

たの表現のままに実態的に意味化すれば、虫麻呂と郎女の情のやりとりは閨房を同じくする男女の△対△相関としてしか、理解のしようがないからである。うた表現を実態として意味化しつつ、淫靡な関係に耽る郎女の像へ絞こもるとする試みは、題詞と左注の記述部のもたらす陳述性によって斥けられ、われわれはうた表現から紡ぎ出される△性△を、そのまま喋々することはできない。

だが、そうでありつつ、たとえば虫麻呂と郎女のうたを読もうとする場合、題詞或いは左注の内容が豊かで陳述性を帯びていなければならないほどに、うた表現はそうした題詞・左注の括弧に捕捉されてしまっている。あなたが獲得しているはずの表現の析出が、「むしろ従兄弟同士の現実の恋愛の相手ではない男女の中に通い合った、ある意味では現実にならぬ傷つくことの無い、甘美な理想の恋がうたわれている」(服部氏)というような、あらたな実態への転嫁のうちにまぎれてしまう危さを無視してかかることはできない。所謂△詞書△を主体とした読みであり評価である場合、ならば、うたそれ独自の達成が、読めたといえるのか否か、疑問が抱かれるのである。うたがかかえ込んでいる周縁部をしばらく持ち、うた表現そのものに執すること、数多い坂上郎女歌そのひとつひとつの達成を考えてみることでしか、あらたな坂上郎女論は拓かれないのではないかとと思われるのである。

以上のような見通しのうえで、彼女の作品を検討してみようというのが小稿のねらいであり、ここで当面の問題とするのは、後述する事由から、およそ冒頭に掲げたような、詳しい左注が施された作品に比してみれば、あたかも無作為に雑纂されたかみえる、次の一首である。左注はない。そして、『集』中直前直後に記載される諸

歌とも組み歌と見做されないうたである。広義的にいえば、郎女が△朝戸出△の君によせたうた。

大伴坂上郎女の歌一首

出でて去なむ時はあらむをことさらに妻恋ひしつち立ちて去ぬべしや (巻四、五八五)

二 出でて去なむ△時△

「大伴坂上郎女歌」とのみ題詞に記されているうたは、なにも「出でて去なむ——」に限られるわけではない。そして、こうした作歌事情が詳しく左注等に記されていない諸歌にあっても、先学の論によって、うたの収載されている歌巻の特色、編集状況、作品の配列、用字の特徴など多角的な視座から種々にわたって論じられ、その事情は次第にわれわれの眼前に明らかにされてきつつあるようにみえる。当該歌についても、諸説諸注釈の説くところは、左注が存在する作品さながらに、いやそれ以上に丁寧に詳細な事情を与えてくれるのである(このあたりは後述)。こうした現況下、先ず注目すべきは『全訳注』(脚注)の注解するところであろう。

漠然として何時でも歌えそうなのは、引きとめ歌として作られたため。事実愛誦され利用されたであろう。簡略な題詞はそれを思わせる。

と、注している。そうであれば、些か乱暴であるが、かの山上憶良のうた

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ

(巻三、三三七)

の罷宴歌とともに、仮構してみるのも可能ではないか。憶良も郎女

も大宰の地であつて、席を同じくすることもあつたらしい。⁽³⁾ 宴席の貴客として、また一方は宴を周旋する役としてである。罷宴の挨拶歌をうたう憶良、それに対する引き留め歌をうたう郎女の姿を、想像することもできるのではあるまいか。

勿論、郎女のうた表現は、もつと相応しいうたの「へ場」を、われわれに要求するであろう。たとえば、後世の例となるが『蜻蛉日記』の次の一節を、具体的表現の「へ場」として拾うことが許されようか。寝待ちの月の山の端出づるほどに、出でむとする気色あり。さらでもありぬべき夜かなと思ふ気色や見えけむ」とまりぬべきことあらば「なはいへど、さしもおぼえねば

いかがせむ山の端にだにとどまらず心も空に出でむ月をば返し

ひさかたの空に心の出づといへば影はそこにもとまるべきかな

とて、とどまりにけり。

男には、この女の他に子を孕ませた愛人があり、公然と同じ車に乗せながら、作者の邸の前を仰々しく騒ぎたてて過ぎ行くこともあつたらしい。女は「ただ死ぬるものにもがな」「いみじう心憂し」と嘆いてもいる。その後やや男の通いは常態に戻りはしたが、結局は「つれなうなりぬ」と綴り、先掲の段が続くのである。女は、山の端にすらとどまらず渡っていく月のように、うわの空で宵のうちから出て行くとする男に、「いかがせむ——」とうたいかける。男は女のうたに感じて、その夜は女の閨房にとどまったのだった。『蜻蛉』の女のうたは引き留め歌、それも男女の「へ対」相関を結束させようとしたうたである。

結論ふりにいえば、おそらく郎女のうたもその表現の基幹とするところは、男女「へ対」相関の結実を希求する、いわば閨房の景を背後に担ううたであるとみてよいであろう。ここでは先ず「時しはあらむを」の表現から、触れてみよう。諸注釈はその大方が、「出て行かれる時はいつでもありませんように」(「注釈」)「家を出て去っていくのにはどよい時は、いつだってありませんように」(「全訳注」)といった理解、つまり現在でなければ男の任意のままに隨時出ていく時はあるものを、と注している。そうであろうか。『評釈』が「慣用句」と認定しているこの「時しはあらむを」であるが、『集』中では他に二例を撫うことができる。摘記して挙げてみよう。

(a) 天離る 鄙治めにと 大君の 任けのまにまに 出でて来し
我を送ると あをによし 奈良山過ぎて 泉川 清き河原に
馬留め 別れし時に ま幸くて 我婦り来む 平らけく 斎ひ
て待てと 語らひて 来し日の極み……汝弟の命 なにしかも
時しはあらむを……白雲に 立ちたなびくと……

(巻十七三二九五七)長逝せる弟を哀傷する歌一首并せて短歌(b) ……咲く花も 時にうつろふ うつせみも 常なくありけり
たちちねの み母の命 なにしかも 時しはあらむを まそ鏡
見れども飽かず 玉の緒の 惜しき盛りに 立つ霧の 失せぬ
るごとく 霞く露の 消ぬるがごとく……

(巻十九、四二一四)「挽歌一首并せて短歌」左注に「右、大伴宿禰家持、翌の南右大臣家の藤原二郎の慈母を喪ひつる患へを弔ふ。五月二十七日」と注を設ける。(a)歌にみる「時しはあらむを」について、『全訳注』は「物には時というものがあつたのに」(脚注)としているが、これは当該歌の

表現を考えるうえでも参考となろう。(a)(b)では、現在の死が不如意な事件であるとのよみ手の嘆きを前提としつつ、惘然とこの先何時でも死ぬことがあるというのではないようである。(b)歌の「玉の緒の惜しき盛り」などの表現を合わせ考えれば、人には然るべき死の△時▽があるにもかかわらず、そうした死の△時▽を待たずに逝ってしまった人のあり様を、哀傷していると理解するべきであろう。

このようにみると、坂上郎女のうた表現をも、「いつだってありましように」ではなく、寧ろ出て行くにはそれがための然るべき△時▽があろうものをと、うたいかけていると解するのが、穩当ではないか。「し」による強調の表現は、女の△時▽に対する意識の度合、並々でない関心の所在を訴えようとする表現記号であろうと思われるからである。

ならば、女にとってこの△時▽とはどのような意味をもつのか、幾つかの例歌を引いて考えてみよう。

(1) 朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日を恋ひや暮らさむ

(卷十、一九二五)

(2) 朝戸出の君が足結を濡らす露原早く起き出でつつ我も裳裾濡らさな

(卷十一、二三五七)

(3) ぬばたまのこの夜な明けそあからひく朝行く君を待たば苦し

(同、二三八九)

(4) 夕凝りの霜置きにけり朝戸出にいたくし踏みて人に知らゆな

(同、二六九二)

(5) 遠妻と手枕交へて寝たる夜は鶏がねな鳴き明けば明けぬとも

(卷十、二〇二二)

(6) 暁と鶏は鳴くなりよしゑやし一人寝る夜は明けば明けぬとも

(卷十一、二八〇〇)

(7) 明けぬべく千鳥しば鳴く白たへの君が手枕いまだ飽かなくに

(同、二八〇七)

(8) 朝鳥早くな鳴きそ我が背子が朝明の姿見れば悲しも

(卷十二、三〇九五)

(9) こもりくの 泊瀬の国に さよばひに 我が来れば たな曇

り 雪は降り来 さ曇り 雨は降り来 野つ鳥 雉はとよむ

家つ鳥 かけも鳴く さ夜は明け この夜は明けぬ 入りてか

つ寝む この戸開かせ

(卷十三、三三三〇)

(10) 我が門に千鳥しば鳴く起きよ起きよ我が一夜夫人に知らゆな

(卷十六、三八七三)

(1) (4)歌は△朝戸出▽のうた。うた表現から見ると、別れが悲しく△朝戸出▽の男をよく見ずにやってしまった女、男が足こしらえをして戸外に出るのを見送る女、男の足元を濡らす露に自分の裳裾を濡らしてみたいと、後追いの叶わぬ悲しみをうたう女、ひたすら秘めた逢瀬が人に知られ、その言の葉にのぼることを恐れる女、そうした女たちがうたい手である。陸まじい共寝に△朝戸出▽を促すのが、(5)歌以下に見る鶏・千鳥・朝鳥の類である。男と女が共に創る時間の終焉を告げるわけである。この△時▽を境にして、たとえ一時的とはいへ実質的な△対▽相関は解体していく。もとより、各々のうたは表現の多様性をもち、帰りに行く男の姿を見送る辛さを嘆き悲しむ女のうた(8)を、そうした解体に添ううた表現であるとすれば、(5)では男は久方ぶりに訪れた女の閨室を出るまゝいと放言してみたうたをうたい、(7)では数多くの鳥の囀りを耳にしつ

つも、男の手枕に飽き足りぬと女は甘え、逆に(9)ではおそらく満足げにしどけなく寝込んでいる男を「起きよ起きよ」と催促する女がいる。(6)はどうかである。これもまた男女の創る時間を背後に据えながらの女のうたである。但し、男は遂に訪れてはくれず、独り丸寝を強いられた嘆きをうたっている。鶏が鳴き他所では男女の創る時間が終焉を迎えようとする(8時)——彼女にとってみれば、悶々として累積してきた虚しい独り寝の時間の終焉を意味するのであろう。

以上、冗長にわたってあたりまえともいえる事柄を述べすぎたかもしれない。だが、こうした確認のうえでもいいたいのは、逆にこの(8時)に至るまでは、たとえ両者にとつて東の間であらうとも、合歓のひとつとき即ち(8時)の相関の結実は十全に保証されているということである。だからこそ、(9)の男は、雉や鶏が鳴く以前に女の閨房に入り成婚を果そうと焦りもするのであろう。うた表現のうえで、男の訪れから鳥の囀りはじめるしのためまで、その間に(8時)の相関は成就し結実し、男は愛語を尽くし、女は軀を拓くことができるという必然が保証されていたのである。(6)

坂上郎女のうたに、たち戻ってみたい。

郎女がうたり「出でて去なむ時はあらむを」とは、上述の(8時)をもつてうたっていると考えられる。鶏・朝鳥・雉そして千鳥(数多くの鳥)が鳴く(8時)、(8時)の相関の終焉——そうした終焉の然るべき(8時)があるものを、と郎女はうたうのではないか。にもかかわらず、男はその(8時)を待たずに閨房の戸を開けようとする。換言すれば、保証されているはずの(8時)の相関を、男は強いて中絶してしまうのである。男はこの女を置いて奔ろうとする。

三 妻恋ひしつ

更に、うたは「ことさらに妻恋ひしつ」とうたい難がれている。「妻」の解釈をめぐって諸説あるが、このことは後述して、先ず表現のうえから次のうたうたと主題を等しくするであらうことを述べてみたい。

(1) 秋さらば今も見ること妻恋ひに鹿鳴かむ山そ高野原の上

(卷

一、八四「長皇子と志貴皇子と、佐紀宮にして俱に宴する歌」)

(2) 春の野にあさる雉の妻恋ひに己があたりを人に知れつつ

(卷八、一四四六「大伴宿禰家持の春の雉の歌一首」)

(3) 妻恋ひに鹿鳴く山辺の秋萩は露霜寒み盛り過ぎ行く

(同、一六〇〇「内舍人石川朝臣広成の歌二首」の第一歌)

(4) 山彦の相とよむまで妻恋ひに鹿鳴く山辺に一人のみして

(同、一六〇二「大伴宿禰家持の鹿鳴の歌二首」の第一歌)

妻を恋うのはひとならぬ鹿或いは雉である。併しながら、つがいを結ぶことができずに恋ひ慕い鳴くこの希求は、当然求めても達えぬ共棲のできぬ想い人たちの希求と重層するはずである。雌鳥を思ふ雉は己れの身を狐男の前に危うし、牡鹿は伴侶を求めて山野に狩するまで鳴きつつ、秋萩の原野を彷徨うのであって、雉も鹿もそのつがいは隔絶した空間におかれて嘆くのである。「妻恋ひ(妻恋ふ)」のことにやや拘泥して、後世のうたを拾う。

(5) 妻恋ふる鹿ぞなくなる女郎花おのがすむ野の花としらずや

(古今和歌

集「卷四秋歌、『躬恒集』(9)、『古今和歌六帖』卷六女郎花)

(10) 妻恋ふる鹿のしがらむ秋萩における白露我もけぬべし

(『貫之集』巻五)

といった躬恒、貫之の著名なうたをはじめとし、時代をくだる

(11) 春日野にいとままめく女郎花妻こふ鹿やこころまどはむ

(『漫吟集』秋歌)

(12) 妻こふと聞きつる宵の鹿のねの夜深くなくは別るとならむ

(『柑取魚彦家集』)

(13) 妻恋ひにあはれと思ひしさを鹿をけさはたにくしいかにかも

せむ (『雲錦集』第二秋歌)

あたりまでたどると、雉・蛙・時鳥・千鳥などに素材をとりつつも、その大方は鹿をもって詠われている。各時代の例歌の一々を挙げるのは割愛に委ねたいが、鹿の「妻恋ひ」はうた表現として夙くより様式化していたとみてよいであろう。『集』中「妻恋ひ」の歌ことばをもつ例歌などは、その表現様式の嚆矢ともいふべき域にあるわけで、やや深読みのきらいがないではないが、郎女のうたう「ことさらに妻恋ひしつ」には

わざわざマルデ牡鹿が妻ヲ恋ウヨウニ妻恋いしながら

という意が込められていたのかもしれない。そうであれば、秋萩の野に或いは女郎花の咲く野に彷徨する牡鹿さながらに、この男は女に心惹かれて夜も明けぬ戸外へと出ていくのである。

このように述べてきて、われわれが整理しておかねばならないのは、「妻」の内実であらう。うたの周縁部を取り込む場合、さまざまな解釈が可能となるのは小稿の冒頭で触れてきたのだが、当該歌の「妻」もまたその例外ではあり得ない。いま『全注』から口語訳を

引く。

帰って行かれるのはいつでも宜しいでしょうに

ことさらにあの子に心を残しつ

帰って行かれることもないでしょう。(傍線は稿者)

『全注』の訳出する「あの子」とは、作者郎女の娘大嬢をいう。

したがって、郎女が夫(愛人)にうたいかけたうたではなく、己が娘大嬢を訪ねた家持の帰ろうとする時分に、(父母)としてうたったうたとするのである。確かに、うたに坂上郎女・大伴家持・坂上大嬢という個性性を絡めてみると、右のように解して不都合はないようにみえる。巻四の歌巻から当該歌一首を含む配列を摘記すれば

(1) 大伴坂上家の大嬢、大伴宿禰家持に報へ贈る歌四首(巻四、五八一〜五八四)

(2) 当該歌

(3) 大伴宿禰家持、坂上家の大嬢に贈る歌二首 離絶数年また逢

ひて相聞往来す(七二七〜七二八)

(4) 大伴坂上大嬢、大伴宿禰家持に贈る歌三首(七二九〜七三一)

(5) また大伴宿禰家持の和ふる歌三首(七三二〜七三四)

となる。こうした作品の配列から、「作者自身に関する妻恋では無くして、娘の婿に対して歌ってゐるのであらう。恋しいが帰るといふやうなことを言った男を、引き留めようとした母親の心なのであらう」(『全註釈』)との注解もなされるのである。更にいえば、先ず家持から贈られたはずの贈歌を併載しない大嬢のうた(1)があり、その後(5)の段階まで家持との仲に所謂「離絶数年」の歳月が始まる

とするのが、一般である⁽⁸⁾。その数年の間に家持をめぐる複数の女たちのうたうたが収載されている。果して家持の愛情遍歴なるものが実態としてあったかどうかはともかくも、題詞とうたの配列に依拠するかぎり、(4)歌の直後に郎女のうたがあることから、他の女に心を奪われて大嬢の閨房を彷徨い出ようとする家持の姿があり、それを憂える大嬢にかわってへ母▽坂上郎女が代詠したという想定もなされてくるのであろう。こうして、うた表現は実態化され、そこにへ対▽相関からは基本的に疎外されるべきへ母▽が、へ母▽としての坂上郎女のありようが、紡ぎ出されてくるのである。

いま、当該歌「妻恋ひしつ」から幾つか作歌事情を諸注釈を参考にしながら想定してみると、おおよそ次のように一覽できるのではないか。

うたう女	「出でて去なむ」男	「妻恋ひ」の妻
坂上郎女	郎女の夫(愛人)	郎女
坂上郎女	郎女の夫(愛人)	男の通う郎女以外の女
郎女の代詠(大嬢)	家持	大嬢
郎女の代詠(大嬢)	家持	家持の通う大嬢以外の女
叔母或いは姑としての郎女	家持	娘大嬢
叔母或いは姑としての郎女	家持	家持の通う大嬢以外の女

これら以外の構成をとっても、「妻恋ひしつ」の内実を説明していくことが可能かもしれない⁽⁹⁾。小稿の冒頭で触れた六六五(虫麻呂)と六六六・七(坂上郎女)のうたうたが、左注の記事を添記することによって、多くをわれわれに語らせてしまうように、このう

たも歌巻の現在の位置に在ることをもって、多岐にわたる解釈を生起させ、その都度異なる郎女の像が顕現してくる。過言の誇りをまぬかれ得まいが敢えていえば、読み手の恣意の数だけ坂上郎女の像がたち現われてくるのである。それでよいか。うた表現の達成をさぐるうとする場合、うたう女とうたいかけられた男と、そして「妻恋ひしつ」と描写される「妻」とのありようは、やはり次のような作品にみられる表現と同様に考えるべきではないであらうか。

湯原王、娘子に贈る歌二首

(21) うはへなきものかも人はかくばかり遠き家道を帰さく思へば

(卷四、六三二)

(22) 目には見て手には取らぬ月の内の楓のごとき妹をいかにせ

(六三二)

む 娘子の報へ贈る歌二首

(23) ここだくに思ひけめかもしきたへの枕片去る夢に見え来し

(六三三)

(24) 家にして見れど飽かぬを草枕旅にも妻とあるがともしき

(六三四)

湯原王のまた贈る歌二首

(25) 草枕旅には妻は率たれどもくしげの内の玉こそ思ほゆれ

(六三五)

(26) 我が衣形見に奉るしきたへの枕を放けずまきてさ寝ませ

(六三六)

娘子のまた報へ贈る歌一首

(27) 我が背子が形見の衣妻問ひに我が身は放けじ言問はずとも

(六三七)

や」とうたうのであったが、この「妻」のうた表現も叙上の「妻」と等質であると考えられる。作者郎女が早々に帰って行くこととする男にイヤミをいっているとする『全集』の注解は、うた表現を実態化しないかぎりにおいて、至当であろう。しのめも未だという時刻にもかかわらず、向う側の女のもとへ去っていかうとする男、その男に対して両者の〈対〉にとっては本来固く隠蔽されておくべきか、おんなの存在を呼び込み挑発するのが、「妻恋ひしつゝ」の第一義的な表現ではないか。ここにうたをもつて離れ行く男を繫縛する、そうした恋うたのちからを読みとるべきであろうと思われる。

鳥が鳴クシンノメノ時ヲモ待タズ

妻恋ウ牡鹿デモアルマイニ、ワザワザアノ方ヲ心ニ懸ケテ去ッ

テ行コウトスルアナタ

ソナナコトガアルモノデスカ

女はうたうことで挑発し、そのうたのちからで男の全てを己がものにしてしようとするのである。

四 結びにかえて

いま、『蜻蛉』の次の件りが想起される。⁽¹⁵⁾

また十月ばかりに、「それはしも、やんごとなきことあり」とて出でむとするに、時雨といふばかりにもあらず、あやにくにあるに、なほ出でむとす。あさましさにかくいはる

ことわりのをりとは見れど小夜更けてかくや時雨のふりは出づべき

といふに、強ひたる人あらむやは

雨に降られて逗留しようという男のうた、雨を事由に引き留めよ

うとする女のうたは多い。⁽¹⁶⁾ この女もまた帰り行く男に「かくや時雨の——」とうたうのである。女の悲愁を顧みずに、振り切つて去る男がいる。そしてあとに残るのは、うたのちからによつても男を引き留めることのできなかつた女ばかりである。たとえそうであれ、看過するべきでないのは、強いて出ようとする男の姿に、「あさまし」と感じつつも女の口を衝いてでたのが、「ことわりのをりとは見れど——」、即ちうたであるということであろう。重ねていえば、恨むべき結果とはなるものの、口ずさむうたのちからによせる女の悲しい期待は、確かに存在していたのである。

郎女のうたは、右の『蜻蛉』に具象化される〈対〉相関の〈場〉、そうした〈場〉のうたと系脈を等しくするうたと解される。但、誤解を恐れて再述すれば、述べてきた事柄から坂上郎女が己が男某にうたいかけたものと実態化するわけではない。無論、若き日の郎女にそのような状況があり、口ずさんだうたが歌メモとして残されていたと想像してもよい。その想像を決定的に否定するべき根拠は、既にわれわれに残されてはいないからである。と同様に、現行巻四のうたの配列から、郎女が大嬢の立場でうかれ歩きの家持に訴えたとも、また交渉の浅い大嬢を想い早々に叔母のもとから退出しようとする家持に、温たかな眼差しをおくりつつ「からかい歌」〔『集成』頭注〕としてうたわれたうたとも読めるであろう。それとも佐保の地で催された宴席で、席もあたたためずに退室しようとする来賓某を引き留めるべく、うたわれたうたか。多様に状況を想定することができよう。

だが、如上のさまざまな作歌事情の差異を包摂して、その根柢にうた表現の喚び起こすちからが内在しているのである。向う側の女

を具現化し、その存在に△対▽相関をさらす、そしてそうすること
で逆に確かな関係の定位をねらう挑発のちからである。このよう
な表現のちからを掌中にしていたのが、坂上郎女と呼ばれる女で
あることにならう。

おそらく郎女が論じられる場合、『集』にのみ記事があることを
もって、先ず「京職藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首」「大伴郎女
の和ふる歌四首」(巻四、五二―五二八)の左注

右、郎女は佐保大納言卿の女なり。はじめ一品穂積皇子に嫁
ぎ、寵をかかふることに類ひなし……

が取り扱われることとなる。この左注の「被寵無礙」に、後の結婚
生活の不幸や残された大嬢、弟嬢への心配やらが絡められて論じ
られていくのが、大概である。左注の記事が録されているのをもっ
て、「貴重」であるという論こそあれ、その表現は史実として実態
化され、疑いの視線が注がれることはない。果してそれでよいのであ
らうか。寧ろ、『集』中詳細な左注や題詞が録されてしまったがゆ
えの歌人の△不幸▽——そうした△不幸▽を坂上郎女という女に一
度据えてみるべきではないか、と思われる。残されたうたうたのひ
とつひとつの表現を読み重ねていくことなしには、坂上郎女論のあ
らたな地平は見えてこないのではないか。

とはいえ、小稿で課題としたのは雑纂されたかに見える郎女のう
た一首にすぎない。後考を期して、試論の綻びについて大方の御叱
正をお願いしたい。

注

(1) 服部喜美子氏「大伴坂上郎女と『恋ひ』——母と女と——」『万葉

女流歌人の研究

(2) 左注と題詞の拮ぎについては、先に拙稿「寵の文芸化——大伴坂上
郎女論——」大学論集第19巻第4号、「田園から愛娘に——大伴坂上
郎女歌の論——」同第21巻第1号で触れた。題詞の拮ぎを方法化する
ことで△文芸▽化してくるといううたい手の創作への過程は、「怨恨
歌」論(承前)「大学論集第18巻第4号参照」。

ここで例とする虫麻呂・郎女歌の延長には、例えば伊美吉綱麻呂と
大伴家持とが交わしたうた「打ち羽振き鶏は鳴くともかくばかり降り
敷く雪に君いまさめやも」「鳴く鶏はいやしけ鳴けど降る雪の千重に
積みこそ我が立ちかてね」(巻十九、四三三、三四)のうたが見え
てくる。うた表現から顕てくる△人性▽は、題詞によって剝脱されて
いる。

(3) 若浜汐子氏は、所謂「梅花の宴」で郎女が主人旅人側として幹旋役
を果していたと説かれている(『坂上郎女』上代文学第9号)。

(4) 上巻(天徳元年七月〜八月)。引用は『全集』147頁。

(5) ここでは「兼家」と「道綱の母」、そして「小路の女」という個別
性は問題としない。

(6) その基底には所謂△神婚幻想▽が存在し、うた表現を保証するのは
その始源として「神謡」をかかえもつからであらう。このあたりは、
古橋信孝氏「恋のうた」『万葉集を読みなおす』に学ぶ。

(7) 素材の面白さでは「から猫」がある。

妻こひによるはうかれて咲く花のあたら春日にねぶるからねこ
(『閑田詠草』雑歌)

妻こひに疲れて眠るから猫の恋にやせたる夢を見るらむ
(『後落葉集』「南泉軒猫」)

(8) △離絶数年▽には、それをめぐる時期と原因が問題とされている。
再会後の贈答歌群に「人言」「人目」を嘆く表現が多いが、その解釈の

相違から異見がある(小野寛氏「坂上大嬢と家持」「大伴家持研究」、
小野寺静子氏「大伴家持と坂上大嬢」『万葉集を学ぶ』第3集など)。

(9) 家持と大嬢を、たとえば駿河麻呂と弟嬢とに置き換えてもよいし、

坂上郎女本人のことがらとして、藤原麻呂などかつての交渉相手との歌メモであるという想定ができないわけでもない。

(10) 中西進氏「湯原王」むらさき第13号。

(11) 湯原王と娘子の歌群については、渡辺讓氏「湯原王と娘子の歌」『万葉集を学ぶ』第3集参照。

(12) 真鍋次郎氏「家もあらなくに」万葉第74号。真鍋氏は『注釈』を享けて、「家」はその住人(人的要素)、恒常生活の営まれる場所(恒常性)との概念をあらわすことばであるとされている。

(13) 諸注の大方は「家に見れど飽かぬを」を、一般的事実としての夫妻について述べたものとするが、ここでは女の立場に引きつけて解釈する『集成』の解がよいと思われる。

(14) 「挑発」については、拙稿「神さぶ——藤原麻呂・坂上郎女の贈答の一首——」文学・語学第108号でも触れた。

(15) 先掲書149頁。

(16) 本文引用の(9)歌。その他『集』に拾えば「鳴る神のしましとよもしさし曇り雨も降らぬか君を留めむ」「鳴る神のしましとよもし降らずとも我は留まらむ妹し留めば」(巻十一、二五二三・四)など好例。注(一)で引いた縄麻呂と家持のうたも同系のうた。

(一九八七、六、三)

「創刊第一号」目次

芭蕉の「わび」とその成立
天平の歌学び
尾形 侑 1

——直訳体短歌の方法

『うたかたの記』論
渡辺千恵子 19

——「ロオレイ」の構図をめぐる

「こゝろ」のオイディプス
石原 千秋 29

——反転する語り

「こころ」を生成する「心臓(ハート)」
小森 陽一 41

梶井基次郎における音楽性
滝沢美和子 53

——自意識の表出と聴覚的リズム

△研究レポート▽
憶良の瓜と栗
木村千恵子 61

△この一篇▽

松田裕「宛字『基督』考」
山田 貞雄 70

前田富祺「近世にはどんな仮名遣いが行われていたか」
西 讓二 71

△学会活動報告▽

成城国文学会研究発表・講演一覧
昭和五十九年度研究発表・講演について

「成城国文学会会報」目次

△この一年▽ 初等科▽大学院

△創刊の辞▽ 創刊に際して

東郷 克美 76

74

73 73 77